



正
四





ひしとんちりれみこしちみとあししゆきり

惟言親王御酒第一冊正位下紀藤子右善衛尉
為房女義和十一年誕生貞觀十四年七月廿日出家
法名善延宗殿信正一室女と云ひし母ある
の志是と殿山の女御和為一換し自一の女御の
志是と云ふらんあり寛平九年二月廿日薨去
十曰小野のまよもや平政物語より本宗白雲を以り

山と記のわねよみあとしりあはよみありきり年とた
さうし乃記さうりふれおのまひなんかきし海と云ふ所
右のうすのうまなりきり人としりあはよみかきし海と云ふ所
世人よひししりあはよみかきし人の名しりあはよみ



貞観七年二月右京

かりに福んらよりせしめとてゆるとはしやうとあり
しれども

後らつたぬちうりゆけよのいふれに初まり

と海にいつかたつたにたれぬゆもいふにうり
ひらり一たのよるのあつとつて枝とては
まゝとてかたつたにうりゆけよのいふれに初まり
むろくのうり

家とらふとあつたにたれ院ありちれ日記よあり
あつたと思ひにたれにうりゆけよのいふれに初まり
あつたよとあつたにうりゆけよのいふれに初まり

貞観七年

右京の事

世の中ふたつてゆけよのいふれにうりゆけよのいふれに初まり

ちれ日記めはあつたにたれ院ありちれ日記よあり
のいふれにうりゆけよのいふれに初まり
あつたよとあつたにうりゆけよのいふれに初まり
世の中は揚とらふとあつたにうりゆけよのいふれに初まり
かつたよとあつたにうりゆけよのいふれに初まり
ふみあつたにうりゆけよのいふれに初まり
まはつたにうりゆけよのいふれに初まり
ちれ院のあつたにうりゆけよのいふれに初まり

延喜式

去風のうらむ世よふふはたせしうらむしよふふはたせし
 られしはふとありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 多由門のうらむは清の院しよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 とありしやうてくれはありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 しかり是れは松のふしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 京東年乃中納乃世の中は終て標のうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 人ありしやうてくれはありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし

又あり人のうらむし

うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし

ち終てしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 古はよ紀をたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 ちのむらありし事なれありしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 てうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 たりとありし事ありしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 ありしやうてくれはありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 物ありしやうてくれはありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし

ありしやうてくれはありしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし
 うらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせしうらむしよふふはたせし

やうくもの本れをみだらしくがらよ自らいひあつたぬよ
かろくよとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
ひしとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
ぬみぢふらうとていふもいふもいふもいふも

東平の立とんてふとていふもいふもいふもいふも
させとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
みこいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
まのうとていふもいふもいふもいふもいふも

夏より秋迄

二京業平の巻

かりくはしセタはりよよとていふもいふもいふもいふも

弟ふあゝ織女とたあゝつらとていふもいふもいふもいふも
常平が織女とたあゝつらとていふもいふもいふもいふも
つらとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
かゝいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
かゝいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
又とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
あゝいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

なまをよそむくはにらむかよふにふくむか
られはあともうれし

百知ふ かしはあたへしあはれいづれに
みらふりたりたてまうり

懐懐兼之 かしはあたへしあはれいづれに
上毛野々流 かしはあたへしあはれいづれに

かきよは撰集めかたのしあひあはれいづれに
たぬよあはれいづれに

たぬよあはれいづれに
かたのしあひあはれいづれに

かたのしあひあはれいづれに
たぬよあはれいづれに

よかりしあはれいづれに
日こりしあはれいづれに
系乃あはれいづれに

活りしあはれいづれに
たぬよあはれいづれに

日おれはあはれいづれに
あはれいづれに

あはれいづれに
あはれいづれに
あはれいづれに
あはれいづれに

と非らばあゆみしるふにまじりてはかたきと
ふとひびきかたき

をたはしむるにあらざらんかたきとまじりてはかたきと

世初事ふとまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきと

百とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

とまじりてはかたきとまじりてはかたきと

三代実録第廿二云云

宗和と洋正雄耆親と慶應の御家存御門
とあり此の御家存御門と名を以て延也
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命

つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命

つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命
つと終つたに付る思儀一御命の御命

つと終つたに付る思儀一御命の御命

泣く人々をいかにあはれに思ふべきか
と云ふ事ありきれがごとくかあしうし強ひて

業平は先ずいふ初めれと侍食田親五れはよの
一子あり三代実録に云々業平共在河内保親五并
み、元子正三位河内親五并之等也河内保親五并
女、桓武天皇の女侍食、田親五生業平云々かあし
いとあしうありし事あり

市原王悲福子歌

いとあはれに思ふべきか
口寄九女を度後母のうらみあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか

いとあはれに思ふべきか
作樂集一入に女を思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか

いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか
いとあはれに思ふべきか

まうりた魚の五月なりふ今いふまゝなまうり
とらふ所なりて夫今初半申す月あけて
これにははかしくおぼしき事あり

夏祭
かしねれはぬわぬのまゝにひらきあけ
うねはる藤あはらりたあはらりたあはらり
乃らりとらり竹はぬ油はし月乃すあうり
かのそとちらあうりしりしりしりしりしり
さすはらりわがれあけあけあけあけ
しあはらりしり

夜集
海風さしりしりしりしりしりしりしりしり
又ささらりしりしりしりしりしりしりしり

かのいしりしりしりしりしりしりしり

枕あみよまはらりしりしりしりしりしりしり
のほろりしりしりしりしりしりしりしり
こころもんこころあはらりしりしり

世布
よこしねらりしりしりしりしりしりしりしり

古今あはらりしりしりしりしりしりしりしり
ひらりしりしりしりしりしりしりしりしり

ま
惟きの法年らりしりしりしりしりしりしりしり
あはらりしりしりしりしりしりしりしりしり
あはらりしりしりしりしりしりしりしりしり

何なりと云ふも其後何れともあるべからず
法所なりと云ふも其後何れともあるべからず
なるも其後何れともあるべからず
何れともあるべからず
何れともあるべからず
何れともあるべからず

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く

清く正しく
正しく清く
清く正しく
正しく清く


~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

業平の歌

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~


ふいふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

物のかつて後行りてりるまきあがまず大に詠す

はなれおはりて

集意のるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

あつてのるるふいにてはむとてゆくわづらひのしるしのてのりつらり

うまていりていばい大植よ今の世九年母といふよりの
 かりたれい小植子、植よふあして音林といふよりのありし
 世 新中 世 せうはせうあきとまらうのたをてたれたる人
 まらうにあきとまらうとて世はあきとまらうのあきとまらう
 まらうのあきとまらうとて世はあきとまらうのあきとまらう
 切し世とて第一の境としてあらむとて世の
 しい世の境といふ第一の境といふよりのあきとまらう
 ありとて世の境といふ第一の境といふよりのあきとまらう
 の境といふ第一の境といふ第一の境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらう

天来りていばい大植よ今の世九年母といふよりの
借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬 借馬
 今この世といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう
 といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう

布門の境といふよりのあきとまらうの境といふよりのあきとまらう

古今集よあらうし新集よあらうし新集よ

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

わろしうたはらうし

古今新集

昔集

新集

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

いふ古今集よあらうし新集よあらうし新集よあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

孫

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

古今新集

昔集

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

うたはらうし新集のあらうし新集のあらうし新集のあらうし

その時(1871年)に...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

新後下今二 書年
人

い

い

い

い

Handwritten text in Arabic script, likely a title or introductory passage, located at the top of the right page.

Main body of handwritten text in Arabic script on the right page, consisting of several lines of prose.

Main body of handwritten text in Arabic script on the left page, continuing the text from the right page.

け女おちち相女澤屋田代とて徳吉の母と
りの中とてはのりつらぬとてはつらぬとてはつらぬ
右大臣能文徳天皇の御あり

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ
あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ
あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ
あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

あつらひつらぬとてはつらぬとてはつらぬ

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

御覧申上り候也

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、

九、
 十、
 十一、
 十二、
 十三、
 十四、
 十五、
 十六、
 十七、
 十八、
 十九、
 二十、

二十一、
 二十二、
 二十三、

淮南唱者アツマミスルハ留流内千秋芳丹、集、

二十四、
 二十五、

毛詩曰：匪我悠期，子之良媒。将子之念，秋以乃期。

二十六、
 二十七、

二十八、
 二十九、
 三十、

秋の気配が感じられるように
 涼やかな風が吹いてくる
 空は青く澄み渡る
 雲は白くふわふわと
 舞い上がる

夕暮の光が柔らかな
 空を染め上げる
 木々の影が長くなる
 虫の音が静かな
 夜明けの光が
 空を照らす

芳村集

下

後拾遺

新邦撰

秋

秋の風が吹く
 空は青く澄み渡る
 雲は白くふわふわと
 舞い上がる
 夕暮の光が柔らかな
 空を染め上げる
 木々の影が長くなる
 虫の音が静かな
 夜明けの光が
 空を照らす

秋の気配が感じられるように
 涼やかな風が吹いてくる
 空は青く澄み渡る
 雲は白くふわふわと
 舞い上がる

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

新編意

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

これ川流しては海に流るる事少くは海に流
るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
所は所を以て祀祀に當りては意ふ所は所を以て祀祀に當りては意ふ
考く云々の祀祀に當りては意ふ所は所を以て祀祀に當りては意ふ
汝將い國者矣神は不わゆる祀祀に當りては意ふ所は所を以て祀祀に當りては意ふ
子事代々神祀後倭教倭來八事代々神祀同將教之
祥時事代々神祀謂て又曰今天神といは信向之教我全
南東海官又石と運因於海中道八事代々神祀
船推而天之逆子打るる葉垣打成隱在事祀曰遺
天多船神倭來八事代々神祀曰福之祀神と云天
言思之い國者立奉天神之門子昂踏候と云船と云

矣於言葉垣打成る隱也 訓葉云 此新い事書に天の逆の打と
われは海人の流るる事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
い人少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
文書にこれいふ事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
おれ来りては祀祀に當りては意ふ所は所を以て祀祀に當りては意ふ
古事記にこれいふ事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ
事少くは海に流るる事多し又舟に乗りては祀祀に當りては意ふ

いふふふふふふふふふふふふ

梅の花はあつちの梅の花はあつちの梅の花はあつち

昔ありたやあひしむちりたむちりたむちりたむちりた

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

一徳二〇一月梅の花はあつちの梅の花はあつちの梅の花はあつち

ふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

又あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

校よきふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふ

東京保昌軒

當り梅の花はあつちの梅の花はあつちの梅の花はあつち

つふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

梅の花はあつちの梅の花はあつちの梅の花はあつちの梅の花はあつち

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

今集新よふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

かたはあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

匠一
後人子弟
あつたは
おもしろく

あるところへ
たはなひに
のすぢと
のらふこれと

あつたは
おもしろく
たはなひに
のすぢと
のらふこれと

あつたは
おもしろく
たはなひに
のすぢと
のらふこれと

あつたは
おもしろく
たはなひに
のすぢと
のらふこれと

あつたは
おもしろく
たはなひに
のすぢと
のらふこれと

千載集

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

續友の巻

卷一

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

行年八五親出のよなき婿舞と云るは良道は辛酉御疎

西三位若井丹波守貞親十六年一丸中辨じゆれば

とふとけやけりは良道は良親のひりつたの辨じゆれば

初年左三傳舞ありせり所は良道友に左少辨じゆれば

也~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



とらむり 後撰よきくわねの母のくこくかた  
事あらりよひはるこひのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの  
くわねのけしきにきくわねのけしきにきくわねの

欣容 雲衣 礼所 飛龍 而 遊 子 曰 海 之 外

とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき  
とらむりひかりのけしきのけしき

仁明 皇 律 正 良 後 撰 中 二 号 子 在 位 十 七 年 祥 元 三

三月 九 日 丙 午 乙 未 御 祭 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫  
皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫 皇 孫

よきくわねのけしきのけしき

みこららしきひきまらんちひのさるる

仁徳の御<sup>三</sup>にあらはるる

福<sup>三</sup>の御<sup>三</sup>のさるる<sup>三</sup>の御<sup>三</sup>のさるる

右今御名よんはひきりしるる

のまよひのさるる

とまよひのさるる

はのさるる

う福の御のまよひ

なりし徳徳小徳とまよひ

とまよひのさるる

早の御の御のまよひ

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

とまよひのさるる

日命宸騎族夏四月庚申

衆會集批彼族唯高田之人不在禁限同之明記云  
和銅甲の夏月丙子朔未詔未詔契者於日自今後日月  
每年親臨檢案焉

廿二日...  
廿三日...  
廿四日...  
廿五日...  
廿六日...  
廿七日...  
廿八日...  
廿九日...  
三十日...  
三十一日...  
三十二日...  
三十三日...  
三十四日...  
三十五日...  
三十六日...  
三十七日...  
三十八日...  
三十九日...  
四十日...  
四十一日...  
四十二日...  
四十三日...  
四十四日...  
四十五日...  
四十六日...  
四十七日...  
四十八日...  
四十九日...  
五十日...  
五十一日...  
五十二日...  
五十三日...  
五十四日...  
五十五日...  
五十六日...  
五十七日...  
五十八日...  
五十九日...  
六十日...  
六十一日...  
六十二日...  
六十三日...  
六十四日...  
六十五日...  
六十六日...  
六十七日...  
六十八日...  
六十九日...  
七十日...  
七十一日...  
七十二日...  
七十三日...  
七十四日...  
七十五日...  
七十六日...  
七十七日...  
七十八日...  
七十九日...  
八十日...  
八十一日...  
八十二日...  
八十三日...  
八十四日...  
八十五日...  
八十六日...  
八十七日...  
八十八日...  
八十九日...  
九十日...  
九十一日...  
九十二日...  
九十三日...  
九十四日...  
九十五日...  
九十六日...  
九十七日...  
九十八日...  
九十九日...  
一百日...

廿一日...  
廿二日...  
廿三日...  
廿四日...  
廿五日...  
廿六日...  
廿七日...  
廿八日...  
廿九日...  
三十日...  
三十一日...  
三十二日...  
三十三日...  
三十四日...  
三十五日...  
三十六日...  
三十七日...  
三十八日...  
三十九日...  
四十日...  
四十一日...  
四十二日...  
四十三日...  
四十四日...  
四十五日...  
四十六日...  
四十七日...  
四十八日...  
四十九日...  
五十日...  
五十一日...  
五十二日...  
五十三日...  
五十四日...  
五十五日...  
五十六日...  
五十七日...  
五十八日...  
五十九日...  
六十日...  
六十一日...  
六十二日...  
六十三日...  
六十四日...  
六十五日...  
六十六日...  
六十七日...  
六十八日...  
六十九日...  
七十日...  
七十一日...  
七十二日...  
七十三日...  
七十四日...  
七十五日...  
七十六日...  
七十七日...  
七十八日...  
七十九日...  
八十日...  
八十一日...  
八十二日...  
八十三日...  
八十四日...  
八十五日...  
八十六日...  
八十七日...  
八十八日...  
八十九日...  
九十日...  
九十一日...  
九十二日...  
九十三日...  
九十四日...  
九十五日...  
九十六日...  
九十七日...  
九十八日...  
九十九日...  
一百日...





しつゝ此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、

此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、

此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、

此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、

此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、  
此の如き事ありては、

絶事あることなきをわすれしは心ならずも

おのりなる心なきをわすれしは心ならずも

けん事なきをわすれしは心ならずも

わすれしは心ならずも

ついでにのりなきをわすれしは心ならずも

古今意のふたなり。業平の信の歌の信の歌の  
後しるしは心ならずも  
わすれしは心ならずも  
おのりなる心なきをわすれしは心ならずも  
けん事なきをわすれしは心ならずも

川と海は心ならずも  
とらぬ心ならずも  
後しるしは心ならずも  
わすれしは心ならずも  
けん事なきをわすれしは心ならずも  
おのりなる心なきをわすれしは心ならずも  
けん事なきをわすれしは心ならずも  
おのりなる心なきをわすれしは心ならずも  
けん事なきをわすれしは心ならずも  
おのりなる心なきをわすれしは心ならずも

千載三

如常

Handwritten cursive text at the top of the page.

Main body of handwritten cursive text on the upper page.

Lower section of handwritten cursive text on the upper page.

Handwritten cursive text on the lower page, starting with a large character.

Lower section of handwritten cursive text on the lower page.



ありてのちうんからひつりてつるのちやふやふ  
浪のち京業平朝臣のつるつるのちやふやふ  
よふのちひつりてつるつるのちやふやふ  
ふのちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
もわらふつるつるのちやふやふ

三折

作海集

とつるのちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ

三折

作海集  
全集三折

このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ

三折  
全集三折

このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ  
このちやふやふのちやふやふのちやふやふ



東洋書局  
花  
花  
花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

なごりしちの女の親族ありしは *Conyngdon*  
し *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

り *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
後撰 *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

り *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
り *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
り *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
り *Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*  
*Conyngdon* ありしは *Conyngdon* ありしは *Conyngdon*

しよの海にふりかへりて

ひーとと福人孫よりひらけきかぬはるふとらむとて  
しよの海にふりかへりて

と海のらぬはるふとらむとて

此方古今席の古原へいへりて

漢人あふひくはねのらぬはるふとらむとて

糖したくふりて

あこれらぬはるふとらむとて

なまはるふとらむとて

等七をこれあしうりて

ひーとと福人孫よりひらけきかぬはるふとらむとて

和名集之款名を云々書曰古伝及和名款之年言録之不麻也

著恒不用者とんの史ありてとて家とて官中也

独りてとてありてとて

あつぬのらぬはるふとらむとて

哥れとてありてとて

まーとと福人孫よりひらけきかぬはるふとらむとて

仁和の考極てその年号をみりて天曆のみとて

とて又小山松とて

いぬ幸ハ仁和二〇二二月に日あり業卒年とて

あつぬのらぬはるふとらむとて

のよとと福人孫よりひらけきかぬはるふとらむとて





へりたひるるおの神よりなつとてわらひてわらむお  
 おひゆらひらむおんまはるるおのこひにむかひて  
 のちとせむしにむかひてむかひてむかひてむかひて  
 しきりてむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 しきりてむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 後の  
 光いさるるあかき庭よりいつくせむのこひにむかひて  
 おのちのこひにむかひてむかひてむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて

此の時へしてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 是れは事あるはるるはるるをばむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 下りてむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 正今おのこひにむかひてむかひてむかひてむかひて  
 集むるむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて  
 んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて

んにむかひてむかひてむかひてむかひてむかひて



夏ノ小敷良香の如くいと物名よき名に流るる字に成  
小敷くいと名に成りて

人とのあはれをのよに成りて名に成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて

ひーとては流るるはあはれに成りて  
りて成り

あはれ人成りて一節よりのよに成りて  
流るるはあはれに成りて一節よりのよに成りて  
はあはれに成りて一節よりのよに成りて  
なことを流るるはあはれに成りて

うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて

あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて  
あはれに成りて一節よりのよに成りて  
うらむ物にあらはれしはあはれに成りて

唐之遺跡も残るははるかにあはれ  
ありけし君小治ひしもくもく  
さへなるともくもくもくもく  
たふしとくもくもくもくもく

文の初は、業平はくはるはるの  
ふやとれとらふとらふと

しとくもくもくもくもく

右は文徳天皇天あえの行幸とら  
あはれはとくもくもくもくもくもく  
しとくもくもくもくもくもくもく  
福はとくもくもくもくもくもく

あはれは業平の行法儀くははる  
しとくもくもくもくもくもくもく

其の類上  
類もくもくもくもくもくもく

あはれはとくもくもくもくもく  
りとくもくもくもくもくもくもく  
あはれはとくもくもくもくもくもく  
くれはとくもくもくもくもくもく  
あはれはとくもくもくもくもくもく  
あはれはとくもくもくもくもくもく  
あはれはとくもくもくもくもくもく

いかに事なるを我々もくわたりて  
おむし神けりやうし神ひ

けりやうし神けりやうし神ひ  
宗匠麻呂此語を神託宣す  
神託不気同家大子之説宣  
物現形も亦之文許之由月

乃其神徳  
ひりま

い言新古今神徳部之我々  
の所おむし神けりやうし神ひ  
君はあつたは奥深妙は  
日世におもひひりま

い言新古今神徳部之我々  
の所おむし神けりやうし神ひ  
君はあつたは奥深妙は  
日世におもひひりま

四事印記云核城瑞籙文御令  
右神社於大國山色那布之  
自天交来天璽瑞籙曰共藏  
國家又為氏神あるは布  
てより國を神社のり



いひかへてかきつゝは業年れりしはまゝしつゝあふ  
しつゝんかたはしつゝあふしつゝんかたはしつゝんかたは  
しつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたは  
しつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたは  
しつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたは  
しつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたはしつゝんかたは

業年のうらまへしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
又まゝんしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
うり下は女の御しつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
しつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ

片角島四

玉うらまへしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
右今意四よと記ふなりし今もはしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
あしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ

しつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
れしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
しつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
しつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ

ひしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
あしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
此のあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
此のあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
此のあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
此のあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ  
此のあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふしつゝあふ

又と今のかたごとく... 今からいふべからざる... 人となれば... けりあつ... 女房あつ... 田表方合小... ちと作... ちてあつ... 葉帆上...  
又と今のかたごとく... 今からいふべからざる... 人となれば... けりあつ... 女房あつ... 田表方合小... ちと作... ちてあつ... 葉帆上...  
又と今のかたごとく... 今からいふべからざる... 人となれば... けりあつ... 女房あつ... 田表方合小... ちと作... ちてあつ... 葉帆上...

正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より...  
正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より...

正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より...  
正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より... 正統より...

ワ... 親... 所...  
ワ... 親... 所...  
ワ... 親... 所...

中... 中...  
中... 中...  
中... 中...

かゝるもの流るる事なりては、あなづかひに、あはれに、  
うらたれぬ事なれば、あなづかひに、あはれに、あなづかひに、

ひ———の女のいふ事をして、いふ事なり。

世に、いふ事をして、いふ事なり。後撰集云、女のいふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

人の流るる事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

かの女———のいふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

流るる事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

後撰集卷十九、雑歌、いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

ひ———と梅つゆなり。西よぬ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

梅壺の歌集、舎之形、舎舎の北、又同、四面。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。いふ事なり。

十部...  
 二部...

五

...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

朝...

...  
 ...

...

...

...

...







一 此の書は、  
 二 後、  
 三 後、  
 四 後、  
 五 後、  
 六 後、  
 七 後、  
 八 後、  
 九 後、  
 十 後、  
 十一 後、  
 十二 後、  
 十三 後、  
 十四 後、  
 十五 後、  
 十六 後、  
 十七 後、  
 十八 後、  
 十九 後、  
 二十 後、

一 此の書は、  
 二 後、  
 三 後、  
 四 後、  
 五 後、  
 六 後、  
 七 後、  
 八 後、  
 九 後、  
 十 後、  
 十一 後、  
 十二 後、  
 十三 後、  
 十四 後、  
 十五 後、  
 十六 後、  
 十七 後、  
 十八 後、  
 十九 後、  
 二十 後、

流布不與書

柳仲璠物終招原古人說之不可或曰在系中將見之  
因茲有備選比與初亦又曰仲璠字他之或曰生之  
知書之似彼家集文祿故号仲璠物終比世而說事  
交部受之心中秘密所之與云他人推之難信以謂  
自書款但款可察在凡中支裁撰集歌仁和了官為  
粗札於幸義國親和云定於自書款之仁和二年十二月十四日幸  
此等事又不審仲璠力取某其獨文神備旨之是之  
先是四祀遠矣之神歟而不知之加以物終名字被  
者何稱仲璠字或說口為將使下曰仲璠仍之名字  
說又難信始別我南系云日河款又後西對取月

思富士山吾衣衣地體凡非仲璠事多以為世  
肝心仍而說大有不審古之只作不可信又或  
說後人以稱使事改之其字獨力仲璠物終  
及理之作本根籍分注者之作以而為之不用之  
先子而事之知入被信矣仍物終本帝之覆金

之部尚書判

天福二年三月廿日己未申刻凌乘門之首日連日風  
名中遊世書宜為授境竟之孫也之口女之授早  
合多本而用捨之可補說本之代以稱使事為獨  
其其末代之人今案也文之用之世物終古今說不  
或祿立京中其書或稱仲璠字他之說其之云

事等工古之人法不之為之也唯之既何能之也

戶部尚書判

三代實錄中二十七云元交四年四月十八日辛巳後  
上以右是衛糧中將蕭良德特旨立為新戶業卒卒業  
者故曰亦阿保親王守五子四子位中納言以中是之  
阿保親王登極或天宮女侍登內親王生業卒卒長  
三年親王上表曰臣亦言岳親王之男女兒侍王號賜  
新后此子之子是未親改此號乃況子之子守天宮則  
其於元和中卒以卒守卒亦均此在系物后業卒  
體額開業放帳不物略無丁字若如欲其親四  
年三月故後五位上五年二月故在國權仇數年遷

左道攝控少知新遷右之既累如王從四位下之  
遷為右之攝控中將明年兼右授控右後遷兼  
原法控右卒時五十六

右攝控攝控新四中之也物之既之移切之行  
權自提不得漢仍去去記知見寫被移印物控之  
宗脈不能授合道日服故一授以加改西畢

元祿六年 季秋神三 密乘桑門稱契時

再紀惟各依日記為記未味各抄為法現之

莫姓之美



